



撮影：篠山紀信（「TOKYO」の写真のみ）

ONE'S
voice
野田秀樹 × アイタイヒト
VOICE.18



HIDEKI NODA



GAMO



ATSUSHI YANAKA

野田秀樹 × GAMO × 谷中 敦

(東京スカパラダイスオーケストラ / Tenor sax)

(東京スカパラダイスオーケストラ / Baritone sax)

旅して交流して見えてくるものが、東京らしさになる。

東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた東京都の文化プログラムのひとつ『東京キャラバン』が、いよいよ本格的にスタート。その名の通り、旅しながら活動し、運ぶのはモノでなく文化、メンバーは固定せず、ジャンルも不問、旅先で出会った人も次々と巻き込んでいく前代未聞のプロジェクトだ。発案者の野田秀樹と、野田が掲げる「文化混流」のコンセプトに賛同し、東京キャラバンが赴く各地で観客を熱狂させた東京スカパラダイスオーケストラのGAMOさん、谷中敦さんに、長い旅の始まりの手応えを聞いた。

東京キャラバンとは

野田秀樹の発案により、多種多様なアーティストが出会い「文化混流」することで、新しい表現が生まれるというコンセプトを掲げた新たなムーブメント。2016年8月には五輪開催に湧くりオデジャネイロにて、9月には東北（宮城・福島）にて、様々なジャンルの日本人アーティストが、現地のアーティストと出会い、国境／言語／文化、そしてそれぞれのジャンルを超えた「文化混流」ワークショップ及び創作を行いました。10月にはそれらの創作と昨年の「東京キャラバン」へのパフォーマンスを組み合わせ、「東京キャラバン in 六本木」を開催しました。東京キャラバンは、さらに活動を充実させながら、全国各地に出現し、「文化サーカス」を繰り広げていくとともに、国や地域を越えた交流を継続的に図っていきます。
<http://tokyocaravan.jp/>

主催：東京都 / アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

言葉をパスして共通のイメージを持つ

——『東京キャラバン』の詳しい内容の前に、このプロジェクトにスカパラの皆さんが参加することになった経緯を教えてくださいませんか？

野田 松（たか子）さんが取り持ってくれたんですよ。

谷中 リオから東京へ、オリンピック（開催地）を橋渡しする企画を野田さんが始められたと聞いて、おもしろそうだったんです。ロンドンオリンピッ

クでも、開催までにいろんな土地を回って、最後にロンドンで大々的に盛り上がるプログラムがあったそうですが、そうやって何年か先を見据える形でやれることはたくさんあるだろうし、それを野田さんが指揮されるというのが魅力的で。以前、松さんが出演された『オイル』（2003年）を僕は拝見していて、こんなに素晴らしい舞台をつくる人がいるんだと驚いたんです。それでぜひ音楽部門で参加させてもらいたいと。松さんの旦那さん（ギタリストで音楽プロデューサーの佐橋佳幸氏）と仲良しなので、松さんにその旨を伝えたら、野田さんを紹介してもらえました。

——松さんは昨年の『東京キャラバン』プレビューに出演され、いわば誕生に立ち会われました。メンバーが流動的で、しかもそんなふうに関わりで参加が決まってくもおもしろいですね。

野田 ちょうど松さんが出演してくれた『逆鱗』をやっていた時期で、メンバーの皆さんが揃って観に来てくれて。楽屋でズラッと並んだスカパラさんの存在感がすごかった（笑）。もうそこをお願いしたんでしたっけ？

GAMO そうだったと思います。そのあと僕らの京都のライブに野田さんが来てくださって。

野田 そこから結構すぐですよ、一緒にリオに行っていたのは。

——オリンピック開催中の8月、能楽師の津村禮次郎さんや振付家の井手茂太さんらも交えて公開ワークショップをされましたね。そして9月には宮城と福島でワークショップがあり、その都度、参加者が入れ代わりながら、現地のアーティストや伝統芸能の担い手の方たちとコラボを重ね、10月の六本木で「文化サーカス」としてお披露目となりました。改めて野田さんに『東京キャラバン』を始めた経緯をお聞きしたいのですが。

野田 オリンピックは近年、スポーツだけでなく文化事業も大切な要素になっていて、じゃあ今度の東京オリンピックでは何をやるのかという議論があるわけです。でも、日本の会議にありがちですけど、理念の話は出て具体的な案はなかなか出ない。そういう中で、例えばどこかの広場に万国旗が飾られたら、それだけで何かわくわくする。そういうシンプルな感覚がまず大事で、それに「文化サーカス」という名前を付けて、分野をクロスオーバーさせて集まったらどうだろうと提案したのが始まりです。その時点では、どうい

ものになるか自分でもまったくわからなかったんですけど。

——それで、さまざまなジャンルの方に声をかけられた。

野田 そうです。で、自分が入り込めるのはやっぱり言葉なので、あるイメージを共有してもらえるもの——詩と呼べるほどのものではありませんけど——を書いて、皆さんにパスして、ミュージシャンならどうい音を入れるか、ダンサーならどんな動きをするかを考えてもらって、それをひとつにしよう。リオと一緒にいった皆さんには、最初に「掘る」というキーワードを伝えたいですね。ブラジルが日本のちょうど反対側ということで、足元をどんどん掘っていったら、地球の裏側に出るんじゃないかという子供の頃の発想から来たものでした。

谷中 そしてリオの会場に着いてから、全員にコピーが配られて。

野田 「掘る」から着想して、確か行きの飛行機の中で書き上げたんです。タイトルは「地球の反対から来たおはなし」でした。

谷中 さっき野田さんは謙遜されていましたが、読ませてもらった時、僕自身も歌詞を書いたりしているものから多少は言葉に敏感なんですけど、これは完全に詩だ、と思いました。ストーリーがあり、イメージが湧く美しい詩で、その中で僕らは自由に参加すればいいんだとわかったし、それがいろんな人の手を渡って、ブラジルのお客さんに広がっていくのはすごく夢のあることだなと思いました。

リオで感じた、能×スカの手応え

——奇しくも、日本から最も遠い場所からキャラバンはスタートしたわけですが、どんなことから始められたのでしょうか？

野田 いや、それがスカパラさんのおかげで助かって。一緒に旅して思いましたけど、外に行くのにこんなに適任の人たちはいませんね。いきなり周囲を引き込む。音楽性もそうなんだろうけど、皆さんが持っている人間性みたいなものがオープンなんだろうな。音が出た途端に注目が集まる。子供なんて最たるもので、どんどん寄ってきました。

谷中 いろいろな土地へ行っていますから、まず自分から心を開く方が早い

HIDEKI NODA × GAMO × ATSUSHI YANAKA

なってことを身体で覚えてきただけです。それに僕ら、何度も南米や中南米でライブをやっているの。

野田 そう、失礼ながら僕は知らなかったんだけど、リオでのスカパラさんの人気はすごい。だから申し訳なかったけれども「最初は客寄せでひとつよろしく」と頼ることが多かった。ま、贅沢な話なんだけど。でもとにかく、音が強いから反応がいいんだよね。

—— リオでは具体的にどんなことを？

野田 つくっていく過程も全部見せたいんです。僕らが使った場所が、オリンピックの時に4つくらいあった中心地のひとつで、歴史的な建造物が並ぶ一角の中庭でした。だから半分オープンで、周囲の建物のパティオから覗いている人も多かったですね。

谷中 カフェも近くにあって、音楽が始まるとそこのお客さんが集まってきてくれたり。ブラジルのミュージシャンともセッションして楽しかったんですけど、稽古初日に野田さんからいきなり、津村さんと谷中のフルートで、ふたりだけで何かやってほしいと言われたのは焦りました(笑)。でも結果的に、すごくいい時間になりました。

野田 見事なセッションでした。それで調子に乗って(笑)、津村先生に「もうちょっとスカパラさんとぶつかってみませんか?」と言ったら快諾してくれたのはいいんだけど、スカパラさん、9人いるのに、その全員と津村先生がセッションしてへろへろになってしまっ……(笑)。

谷中 ご本人は「へろへろにはなっていない!」とおっしゃっていましたが(笑)。でもスカパラのソコと1対1で、しかも能対峙するって体力も気力もとんでもないですよ。津村先生、めちゃくちゃ格好良かった。

野田 終わった瞬間に、お客さんがワーツと大歓声で寄ってきて。

谷中 津村さんの格好良さが、観ている人全員に伝わっている感覚がはっきりあって、能のことを知らない人も多かったでしょうに、この格好良さをわかってくれるんだというのが、僕はたまらなくうれしかったです。

GAMO 僕らもそうだし、おそらく津村さんも、野田さんのリクエストに対しては、無茶だなと思いつつ、なぜか燃えるんですよ。そこを見越して投げかけてくれるのかなと。

野田 そういう邪心はないです。ただもう、頼れそうな人に頼っているだけ(笑)。

行った先の人も巻き込むのがキャラバン

—— リオのあと、9月に宮城と福島でワークショップを含めた公演があり、10月の六本木でのお披露目では、リオからダンサーやミュージシャン、東北の鹿踊り(岩手県)や雀踊り(宮城県)といった、これまでの旅先で出会った人がキャラバンに加わり、それぞれのコラボが観られました。

野田 行った先で何か受け取って帰ってくるって、行った先の人を巻き込むことは、最初から考えていました。キャラバンとは本来、ただ移動するのではなく、取引が目的の旅なんです。そういう双方向の関係が築けると、こちらもその後の作品の幅が非常に広くなりますし、もともとあるものと新しく入ってきたものとの意外な相性の良さも発見できたりする。今回、ブラジルのチームが入って気付いたのは、リズムさえ取れば、そこから交わっていけるんだと。ミュージシャンやダンサーの人たちは、リズムを取り出して話がどんどん進むんですね。それはすごく興味深し、羨ましい。

GAMO 僕らがやっているスカは、もともとはジャマイカで生まれたリズムなんですけど、結構、日本の古典音楽に近いところがあったり、実はいろんな地域の音楽にハマるんですよ。

野田 一緒にやってみてわかるのは、交わりそうにないものも意外と共通点が見つかるし、当然だけど大きな違いがあるということだよ。例えばブラジルの人たちのステップは、なかなか日本人には真似出来ない。

谷中 しかも彼らにとっては、当たり前過ぎるくらい当たり前の技術なんです。それこそが1番おもしろい部分で、僕らが何気なくやっていることが彼らには「それ、どうやっているの? おもしろいね」だったりする。キャラバンはそういうことがたくさん発見できて、それぞれの文化の価値がどちらも上がっていくのは素晴らしいですよ。

オリンピックのあとも続くプロジェクトに

—— ところで皆さんは東京らしさについてどんなふうにお考えですか?

『東京キャラバン』と名乗り、東京から出発して東京に戻ってくるプロジェクトなので、ぜひお聞きしておきたいです。

野田 東京が主語になると、東京に住んでいる人間は、自動的に日本のことだと思う人は多いし、実際、そういう場合もある。オリンピックも東京の人たちだけのものではないでしょう? だから難しい問題ではあるんだけど、『東京キャラバン』を始めるにあたって僕が言っているのは「文化は交通」だということ。要するに、東京という場所に行き来する道をたくさんつくり、そこで出会ってどんどん交流することが大事なんです。キャラバンで行った先々の人を連れてくるのはマレピト(他界からの来訪者。異人、稀人)を迎えることだし、そういうスタイルが東京らしさということではないかなと考えていますね。

谷中 東京で1番派手に遊んでいる人は、意外と東京出身の人じゃなかったりするし、「俺は東京人だ」と言ったら誰でも東京人になれる。だから東京らしさって難しいですけど、逆にその懐の深さが東京だと思います。それだけですごく夢がありますよね。

GAMO 僕は北海道出身です。東京って何だろうということは未だにわかりません。でも海外に行かせてもらって、東京スカパラダイスオーケストラというバンド名は本当にわかりやすく、世界中どこでもそれだけで全部の

説明が済む。おかげでどこに行っても自然体でいられるんですよ。

—— 地図上にある東京ではなく、旅をして出会って交わるという運動の中に新しい東京を探す、コラボレーションから浮かび上がってくる差異や共通点から東京を再設定するのが『東京キャラバン』だと理解していいでしょうか?

野田 まあ、そういうことです。キャラバンはプロセスを見せるものでもあるので、いまのところはワークショップや公開稽古と言っていますが、いずれはつくっている過程も全部オープンにしていきたいです。

GAMO ワークショップは僕らにとりかたなり新鮮でした。普段はつくるところは見せない。ライブかCDを作品として発表するじゃないですか。でもリオでは、つくる過程を見せることで、お客さんの空気感もパッケージできるんだと知って、それが衝撃的だったというか。

谷中 新曲をつくって録音してライブで演奏するのが僕らの通常の作業ですけど、レコーディングした後に「あ、ここはこうしておけばよかった」と思うことがあるんですよ。だったらレコーディングする前に披露して、お客さんと一緒につくり上げていく感覚で、構成やアレンジを練り直すことがあってもいいですよ。お客さんを前にしてやってみると正解が見えやすいと思うので、公開リハはわくわくしながらやれますね。

—— 谷中さんとGAMOさんにお聞きします。表現者の中には、芸術や文化といった言葉に堅苦しさや権威性のようなものを感じて拒否反応を示す方がいますが、スカパラさんは抵抗はありませんか?

谷中 大学時代から、友達と誰も行かないような映画を観に行ったり、あまり有名ではない小説家の本を読んでは「こんなにおもしろいのにね」と話したりするのが、とても楽しい時間でした。その延長で芸術的なものは大好きです。自分たちの芸術的な部分は常に向上させていきたい指向もあります。『東京キャラバン』がいいと思うのは、いろんな文化が混ざりながら、すごくきれいな形になっている点です。駒沢公園

での「東京キャラバン〜プロローグ〜」(2015年)の写真を見ていただいた時に感じたのは、いろんな文化がごちゃっと入っているのに、整理されたひとつの絵として成立しているということでした。「ああ、こういう芸術のあり方って気持ちいいな」と思ったんです。参加することで、それをより深く理解できるんじゃないかと思えますし、バンドマン、ミュージシャンの立場として言うのであれば、文化という新しいコミュニケーションツールを僕らなりにアップデートしていければいいなと。

GAMO 僕はスカパラのメンバーに出会う前にジャズの世界にいて、素晴らしい人々をたくさん見てきたんですけど、そのなかですごく下世話なことから、高尚と言うと大げさですが、いわゆる芸術文化の世界まで、分け隔てなく入っていくことができました。だから芸術

とか文化という分け方の前に、自分の耳や目で「いい」と感じたものを信じてやっていますね。

—— 野田さんは、オリンピック後もこのプロジェクトを続けたいとお考えなんですよ?

野田 今度のオリンピックはレガシーがキーワードのひとつですけど、遺産というのは箱モノ(競技場など)だけではないだろうと思うんですね。文化的な遺産も残るべきで、それは人材であったり作品であったりするでしょうが「あのときのキャラバンから育った」という人が出てきたらすごいし、キャラバンがそういう場所として続いていったらいいと思う。現段階では夢ですけど、不可能ではないと思っています。

モデレーター・文:徳永京子 撮影:押木良輔

今回のアイタイヒト

東京スカパラダイスオーケストラ [GAMO・谷中 敦]



ジャマイカ生まれのスカという音楽を、自ら演奏する楽曲は「トキヨースカ」と称して独自のジャンルを築き上げ、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、南米と世界を駆け巡る大所帯スカバンド。1990年メジャーデビュー。これまでオリジナルアルバム19枚発売。2015年に25周年を記念してオールタイムベストアルバム「The Last」を発表した。現在、全国ライブハウスTOUR「Paradise Has No Border」全25公演を敢行中! www.tokyoska.net

野田秀樹 HIDEKI NODA

1955年、長崎県生まれ。劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。東京大学在学中に「劇団 夢の遊戯社」を結成。92年劇団解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。以来『キル』『赤鬼』『ハンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『エッグ』『MIWA』『逆鱗』などの話題作を発表。歌舞伎『野田版 研辰の討たれ』の脚本・演出や、モーツァルト歌劇『フィガロの結婚〜庭師は見た!〜』の演出、海外での共同制作など、演劇界の枠を超え国内のみならず海外でも精力的な創作活動を行う。様々なアーティストとの文化混流による「東京キャラバン」を2015年よりブラジルや東北など国内外で展開。

NODA・MAP 第21回公演 「足跡姫〜時代錯誤冬幽霊〜」 ときあやまってふゆのゆうらい 作・演出 野田秀樹 www.nodamap.com/ 特集はP1~2へ

